

実践倫理

シンポジウム

「日本、今そこにある危機」

～心の東京革命を江戸川区から～

期日 平成12年10月27日（金）

場所 江戸川区民ホール・大ホール

主催 未来につなげる人づくり実行委員会

後援 江戸川区教育委員会 江戸川区保護司会

警視庁小松川警察署 関東第一高等学校

警視庁葛西警察署 江戸川ロータリークラブ

警視庁小岩警察署 警視庁江戸川少年センター

國士舘大学武道徳育研究所

野 木 將 典

目次

- 一、はじめに
- 一、江戸川区から、明るい社会づくりを全国へ
- 一、次代のために、行動は今
- 一、開 会
- 一、まず第一に教育を
- 一、学校・地域・行政の連携が大切
- 一、政治家の責任大きい
- 一、基調講演 國土館大学教授
「日本、今そこにある危機」
- 一、パネルディスカッション
コーディネーター
- 一、少年犯罪の実態報告
- 一、更正保護
- 一、江戸川区ならではの新しい心の革命を
- 一、最も大切な幼児教育
- 一、心を育てる社会づくりを
- 一、閉 会
- 一、参考資料

プログラム

江戸川区長	多田正見
東京都知事	石原慎太郎
実行委員長	中 眞久
衆議院議員	宇田川芳雄
江戸川区教育長	池澤正彦
江戸川議会議長	松下彰男
武道徳育研究所長	野木將典
学校カウンセラー、臨床心理士	山崎友丈
警視庁葛西警察署生活安全課長	遠藤 誠
江戸川区保護司会長	金井兼吉
江戸川区教育委員会指導室長	高崎 彰
江戸川区松江幼稚園長	松川郁子
関東第一高等学校長	吉村 正昭
國土館大学教授	中島 豹

はじめに

是非はともかく、連日続発する青少年の凶悪犯罪は目を覆うばかりの状況にあり、このことは私たち共通の認識とするところであります。

最近の日本はもはや平和で安全な国と呼ばれていた「安全神話」は大きくくずれ去り、あのサリン事件を頂点として世界各国より少なからず恐れられていることは事実であります。

私は日頃から子供を育てるには、「家庭」と「学校」と「地域」が一体となって育てることが最も大切なことであると思っています。

このことに鑑み、私は地域における「未来につなげる人づくり」実行委員会を主宰し、昨年（平成十二年）シンポジウム「日本、今そこにある危機」を開催いたしました。

シンポジウムにおけるあらゆるジャンルの方々の御意見をここに掲載し、教育改革の一助になればと深く思うしだいです。

時、同じくして東京都においては、心の東京革命を推進しており、タイトルに「心の東京革命を江戸川区より」と提唱致しました。

野 木 將 典

。江戸川区長 多田 正見

江戸川区から、明るい社会づくりを全国へ

シンポジウム「日本、今そこにある危機」が盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

このシンポジウムは「未来につなげる人づくりの集い」の代表野木将典さんの呼びかけに多くの方々が賛同して開催されたと伺っております。皆様のご努力に深く敬意を表します。

今、社会の状況を見ますと、少年非行の増加、凶悪化など青少年の健やかな成長に影を落とす暗い話題に事欠きません。

子どもたちの規範意識・社会性の低下が指摘されている背景には、少子化や情報化の進展、物質的な豊かさや都市化などの進展に伴う弊害によって、家庭、学校、地域での教育力が失われたことにあるといわれています。

しかし、その一方で、自分の夢や希望の実現にひたむきに努力する青少年や、ボランティア活動などで社会に貢献している子どもたちもたくさんいることも事実です。

区では、こうした実態を踏まえ、平成九年から「幼児・児童・生徒健全育成推進本部」を設置し、青少年の健全育成に積極的に取り組んでおります。また、学校においても、家庭・地域との連携を一層深め、さらに、数多くの団体が、次代の担い手のために、様々な活動を行っているところです。

こうした中で、住民主役のシンポジウムが開催されることは誠に意義深いことだと思えます。

今日、参加された多くの皆さんのご協力により、本区から明るい社会づくりの活動が全国に向けて発信され、大きな輪となりますことを心から願っております。

皆さんの一層のご活躍を祈念してご挨拶いたします。

平成十二年十月二十七日

。東京都知事 石原 慎太郎

次代のために、行動は今

シンポジウム「日本、今そこにある危機」が江戸川区総合区民ホールにおいて盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

このシンポジウムは、これからの社会の中心となる若者が意欲と希望をもって社会参加し、彼らに無限の可能性と力を発揮してもらおうと、江戸川区民を中心として結成された「未来につなげる人づくりの集い」によって実現したものです。「未来につなげる人づくりの集い」の皆さんのご尽力に感謝するとともに深く敬意を表します。

若者たちが置かれている昨今の環境を見ますと、精神的な価値よりも物的価値、社会的責任よりも個人の権利を優先するという風潮がまん延しています。家庭や地域社会の子どもたちへの影響力が著しく低下したとことと相まって、青少年の凶悪な暴力事件や学校でのいじめなどが毎日のように続発する、極めて深刻で危機的な状況にあります。こうした問題の根底には、社会で最低限守らなければならない人間としての基本的なルールの欠如や物事の基本的な道理の喪失が強く感じられます。

東京都では、次代を担う子どもたちに対して、親と大人が責任をもって、正義感や倫理観、思いやりの心を育み、人が生きていくうえで当然の心得を伝えていくため「心の東京革命」に取り組むこととしました。今年八月に「心の東京革命行動プラン」策定し、今月十八日には、東京国際フォーラムにおいて、「心の東京革命都民集会」を開催し、都民の皆様をはじめ、多くの民間団体の参加を得て、都民全体の運動として本格的に活動を開始しました。

今回のシンポジウムは「心の東京革命を江戸川区から」と、さっそく「心の東京革命」の趣旨にご賛同いただいたもので、大変心強く感じています。東京、ひいては、わが国の明日を切り拓いていくために、今こそ私たち大人が、次代を担う健全な若者を育てるための行動を起こさなくてはなりません。これからも、江戸川区をはじめ各区市町村や様々な団体と力を合わせて、「心の東京革命」を社会全体の運動として展開していきたいと思っています。皆様のご協力を心からお願いいたします。

平成十二年十月二十七日

☆シンポジウム

心の東京革命を江戸川区から

「日本、今そこにある危機」

平成十二年十月二十七日（金）

於：江戸川区民ホール

開 会

☆実行委員長 中 眞久

「未来につなげる人づくり」の集い主催のシンポジウムに皆様方ご参集いただきましてまことにありがとうございます。このシンポジウムに向けまして、江戸川区長 多田正見様並びに東京都知事の石原慎太郎様から、皆様お手元のプログラムのありますようなメッセージをわざわざ頂戴しております。そして後援をいただいた江戸川区教育委員会ははじめ、諸団体の方々には本当にありがとうございます。野木代表、そしてその他実行委員一同、八月の末より手弁当で今日に漕ぎ着けました。パネラー並びにコーディネーターの方、それらの方すべてに大変不躰なお願いですが、無報酬ということでお声を掛けさせていただき、それで馳せ参じていただいた訳でございます。そんな訳で準備整わないところでご不満もあらうかと思いますが、どうぞご容赦くださいませ。

今日のシンポジウムにつきましては、あれも駄目、これも駄目というようなことではなくて、これからどうしたらいいのか？何から手がけていけばいいのか！そんなことをコーディネーターの方々に、そしてパネラーの方々に色々とお話いただければと、そのように思っております。どうぞ皆様ごゆっくりとお聴きおよびのほど、よろしくお願いします。ありがとうございました。

☆衆議院議員 宇田川 芳雄

まず第一に教育を

今日は「未来につなげる人づくりの集い」ということで、このようなシンポジウムあるいは懇親の集いが開催された訳でございますが、友人として長いお付き合いをしている、今日の主催者であります國士舘大学の教授野木 將典先生から、まだ夏の暑い時期でしたけれどもお話がありまして、シンポジウムをやって、そして多くの人たちから教育についての意見を聞きたいのがあるだろうかということでした。

私は、野木先生の燃えるような教育、人づくりに対する情熱というのは、いつも大変敬服し尊敬をして受け止めている人間の一人でございますから、それは素晴らしいことだと賛同したわけでございます。

少子高齢化の時代ですから、特に小さいお子さんたちの教育、お年寄りの福祉等というものは、膨大な要望が出てくる訳なんですけれども、たくさんニーズ、たくさん政策の中で何を一つ取り上げたらいいのかと言えば、私は躊躇することなくそれは教育だ、人をつくること以上に大事なことがあるだろうかということを、申し上げてきたところでございます。

それだけに野木先生からお話を伺った時には、素晴らしい企画ですね、なかなか一般の人に受け止められにくい問題だけれども、しかしこれがこれからの最大の課題だとするならば、先生私もお手伝いできることはさせていただきますよ、と言って準備会に出席をさせていただきました。

どうぞ今日のこの会合を基盤として、多くの皆さんが新しい時代の、もう二カ月で二十一世紀ですから新しい時代の教育、子づくり人づくりというものを十分に理解して、多くの賛同者に与えていただければありがたいと思っております。今日はお手元の名簿にあるようにパネリストの先生方、江戸川区に関係ある先生が大部分であります。パネリストの先生方それぞれの分野のオリソリティーを揃えさせていただいて皆さんに色々お話をいただくことになっております。

存分にお話をお聴きいただき、皆様のご意見も聞かせていただければありがたいと思います。パネラーの先生方にもどうぞよろしくお願いすると同時に、ご参加いただきました皆様方だんだん寒さも加わりますので十分ご自愛をいただきまして、ご活躍をいただきますようお願いを申し上げます、言いつくせませんけれどもご挨拶にかえたいと思います。今日はありがとうございました。

☆江戸川区教育長 池澤 正彦

学校・地域・行政の連携が大切

本来でありましたら今日は区長の多田正見が参りまして、皆様にご挨拶を申し上げるところでございますが、折悪しく前から他の用務が重なっておりまして出席することが出来ません。代わりまして私からご挨拶をすることをお許しをいただきましたと存じます。まずもって、本日皆様の参加を得ましてこのようにシンポジウムが行われる運びとなったことに、関係者の皆様に深く敬意を表したいと思います。取り分け、その中心的な役割を担っていただきました、先程もお話がございましたが國士館大学の野木先生、その情熱と行動力、これがなければ本日のシンポジウムがあり得なかったでございます。

また、それを脇で一生懸命支えていただきました、実行委員会の中委員長さんをはじめとするメンバーの皆様の長期にわたる手探り状態の中で、企画から実施に至るまで大変お骨折りをいただきました。あらためて深く敬意を表したいと思います。ありがとうございます。

今日二十一世紀の子供たちを何としても、すこやかに育て上げたいという願いは、私たち全員の願いであると思います。そのためには、皆様ご承知のとおり家庭はもとよりでございますが、学校、地域、行政あげて、それぞれの力を合わせていく、そして真の連携の実を上げていくことが大事であるということでございます。そのためには何としても大人が、子供たちの現状の姿、問題点を正しく理解して、共通の認識で行動していくことが大変重要でございます。そうした意味で今日のシンポジウムといえますのは、誠に理にかなったものと考えておりまして、ぜひ本日のシンポジウムが皆様にとりまして大変有意義なものになることを願っておりますし、また今日を一つの起点としまして、子供たちが大変健やかに元気に明るくそして豊かな人間性を培って育ていくことができるように、皆で力を合わせてまいることをお互いに誓い合うということで今日のシンポジウムが素晴らしい成果を上げますようお願いいたします。私どもも併せて力を発揮してまいりたいと思いますので、どうぞ今後とも皆様よろしくお願いを申し上げます。それでは簡単ですけど私からのご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

☆江戸川区議会議長 松下 彰男

政治家の責任大きい

今の時代はいろんなことを考えてみましても、酷いことあるはどうしようもないようなことがたくさん起こっております。私は大学生の時に政治家になろうと志しました。それは、実はマックスウェーバーの『職業としての政治』という本の中に書いてあるのですけれども、倫理観の旺盛な高潔なそして人格識見ともに立派な人だけがやる資格のある大変尊い職業であるということなんです。男としてやりがいがあるなということでこの道に入りました。しかし今政治家といえば大体悪役の代名詞になり、悪い奴嘘つきどうしようもないという状況になっております。大変残念ですが、最近はそのイメージもちょっと薄らぎました。官僚も警察官も経営者も皆悪いから、政治家の悪いのが薄らいできたのです。またいろんな事件が多発しておりますけれども、これも数十年前には考えられないようなことがたくさん起こっております。すべて教育が原点ですね、教育の問題にその原因があります。ですから今まで日本が戦後行ってきた教育がやはり間違っていたとしか考えられません。そのような状況の中で危機的な気持ちを持って野木先生はじめ皆さんが立ち上がったわけでございますけれども、これからの教育をどうしたらいいのかというふうなことを考えることは、大変大切なことだと思います。そして真剣に取り組んで本当に未来に素晴らしい教育をつくり上げる、その礎をこれからつくり上げなければいけないと思います。それが私たちの責任でもあると思いますので、これを一つの契機にして多くの皆様方に教育を考えようではないかということで実践していただければ大変ありがたいことだと思います。これからの教育の問題には大変関心がございますし、出来るかぎり素晴らしい教育をつくり上げるために、これからも努力してまいりますので、皆様方と共に楽しみにしながらこの活動を眺めていき、また同時に協力させていただきたいと思っております。どうぞよろしく願いたします。ありがとうございました。

基調講演

國士館大学教授

武道徳育研究所長 野木 將典

日本は平和で安全な国であるという安全神話はオウム事件を頂点として大きく崩れ去ったのであります。

最近一連の事件をここのみなさんといっしょに考えてみたいと思います。

。まず病院のいくつかの不祥事を見ると、き病院は患者の生命を守るものであるという常識が通用しなくなっていることを示しております。

。親がベランダに幼い児を放置して死亡させた事件

。ある日突然母親に注意されたからといって寝ている母親をバットで殴り殺すというショッキングな事件

。少し前になりますが自分の子供に保険金を掛け毒殺を謀るという想像すら出来ない事件、これなど日本はそういう人間がいない国だったのが、いつのまにかそういう人間が出てくる日本になってしまったはずかしい、なさけない事件だと思います。

。そして通勤のサラリーマンがゆったちと電車で寝ているところをいきなり車内に入ってくるなり金槌で頭を叩き割るという恐ろしい少年の電車事件

。又生きているままガソリンをかけてトンネルの中で焼き殺してしまった世にも恐ろしい事件

。連続して起ったストーカー殺人事件、これなどまったく自分には身に覚えがないのに勝手に好きになられて殺されるという何ともやりきれない身勝手な事件

。それと他人の家の戸が開いていたから入って行って、いきなり主婦を四十数カ所にわたってナイフでめった差しにするという考えられない事件、警察の質問に少年は「人を殺してみたかった」と答えたとのこと。

。最後に一連のキレる17才少年による凶悪事件の数々などく上げれば言いつくせない事件だらけです。

私はこれらの問題を考えた時どこから取り組んでいくべきか、つまり家庭における家庭教育、学校における学校教育、社会にお

ける社会教育などあらゆる分野から考えていかなければなりません。

先程松下区議会議長さんが戦後教育の誤りが今日の現状を生んでいるとのお話がありました。私も同感であります。私はこの現実をまず足元から見つめ直さなければならぬと考え本日のシンポジウムを開催する運びとなったのであります。私たちはともすると勤務先の職場を中心として生活をしておりますが、子供たちが育っていく地域においてどれだけの力をそいでいるでしょうか、最近起った事件で、女優の三田佳子さんの二男事件があります。これなど子供に対する接し方のむずかしさを顕著に物語っております。

たとえば子供に与えるこずかい一つをとっても、始めは百円が千円になりそして一万円になりいつの間にか月何十万円というような金銭感覚になってしまったのです。知らず知らずに悪い芽がドンドン育っていったのです。

古いことわざに次の様な話があります。良農は草を見ずして草を取る、中農は草を見て草を取る、怠農は草をみて草を取らず、つまり怠け者は草が生えても草を取らないということです。

私たちは子育てにおいてこの言葉があてはまるのです。悪い芽は早く摘み取ることが大切であり、逆に良い芽を育てることは将来立派な成長を見ることが出来るのではないのでしょうか、良い芽とは心の成長を意味しているのです。

私はこのシンポジウムを考えたとき、時、同じくして東京都においても心の東京革命を推進していたことを知りました。家庭“学校”地域“が一体となって未来につなげる人づくりを考えなければなりません。

先だって渋谷公会堂においてコーディネーター桜井よし子さん、パネラーに上坂冬子さん、黒川紀章さんなどのシンポジウムが開かれました、その結論の一つに明治維新の強い魂・精神を持って教育を改革しなくてはならないと、つまり明治維新の大教育者吉田松陰の様な教育が大切であると話しておりました。

本日のパネラーの方々はその道のエキスパートの人達です、十二分に御意見を拝聴していただきたく思います。

最後になりましたがタイトルにあります「日本、今そこにある危機」ですが、私が申すまでもなくみなさんが身近に感じている、あらゆる事がこの言葉に凝縮されております。

中国の古い話に「キシリンカスク雉燐火救」という話がありますが、これは山火事になったとき、山の動物はみんなにげてしまったのにキ

ジだけは残ってその山火事を消す為に近くの川にいったては羽根を濡らして一心不乱に自分の巣を守ろうとしていたとき、天帝がキジに聞きました「お前はその様なことをすると焼死んでしまうではないか」と、キジは答えました「自分が日頃お世話になっている山を守る為にやっているのです」、天帝はこの行為を知って雨を降らし山火事を消してしまっただのです。日本は今、この話の様にあらゆるところで火がついております。どうか一人一人が力を発揮して平和で安全な日本を、つまり私たちの住んでいる地域を一時代前の世界の国々より尊敬されていた「安全神話」をとりもどすことを念じ私の話を終わりたいと思います。

パネルディスカッション

☆コーディネーター 山崎 友丈

子供の危機というものを感じてまして、これから未来の子供をどうつくっていくのかということを非常に真剣に話をしているのを聞いて、非常に感動しているところなんです。

実は今日は五人のパネラーの方にですね、本音で語っていただこうと思ひまして、あまり打ち合わせもしていないのです。その理由は何かと申しますとですね、本当のことを本音で話していただく、そしてその中から何か糸口が見つかるのではないかという事で打ち合わせはやめようという話で、とにかく本音で話していただくということになりました。

今日は私がコーディネーターというよりも、司会のお手伝いをするという形で、先生方それぞれが自分の意見を述べていただくというように、そういう進行で進めていきたいと思っております。よろしく願ひします。

まずですね本当に昨今、こういう青少年の問題が出てきていますけれども、まず皆さん本当に教育なのか、学校教育なのか、あるいはその家庭教育に本当に問題があるのか、あるいは地域社会に問題があるのか、家庭の責任にすると非常に簡単ですね、それに学校教育の責任にするのも簡単なんです。また、地域社会の人間関係が希薄になっているんだというのも非常に簡単なんです。でも実際本当にそれだけでこういう問題が起こっているのかどうかという実態ですよね。ですからまずその実態から入っていかないと、なかなか紐を解く訳にはいかないと思ひます。ですから先ず、その辺の一体今、青少年が置かれている、子供たちが置かれている立場というものを話し合っていたらこうと思ひます。

一番最初に生活安全課の遠藤先生からお話をいただきたいと思います。願ひします。

☆警視庁葛西警察署生活安全課長 遠藤 誠

少年犯罪の実態報告

葛西警察は昭和五十七年五月十日に小松川警察から分離独立しました。管内は十六キロ²で、居住する人口は区役所調べですと二十三万人、警察調べですと二十五万人という、二万人の差がありますが住民登録がなされていないという関係でござひまして、なんら江戸川区に限ったことではありません。どこの地域もこのくらいの誤差はござひます。そして九万くらいの世帯が住んでお

られるというのが葛西警察の担当する管内でございます。

警察はどのようなことを重点にやっているのかということについて三つほど申し上げます。一番身近な交通事故の防止、そして重要犯罪の防止とそして、ピッキングの防止または検挙でございます。そしてまず最初にですね、交通事故防止についてお話をしますと、本日までに、今年は六件の死亡事故が発生している次第でございます、つい先だつての二十三日ですか月曜日午後九時ごろ、管内で起きまして不幸にも死亡^ひ轢き逃げ事件が発生しまして、現在まで犯人は逃走中という次第であります。また重要犯罪につきましては、幸い発生はございません。いわゆる重要犯罪というものは、どういうものかと言うと、典型的なものは殺人事件でございます。殺人事件がないから平和な町だなどお思いかも知れませんが、含みがありまして、この後に引き続き説明をいたします。これはですね、当初管内に殺人事件がないことですが、尾ひれが付きまして、当初管内に居住していた、または勤務していたという方が今年に入りまして二月七日です、二人の方が殺害されております。

まず一件目はですね、三月に発生しました。いわゆる環七に面した交差点におきまして警備の人身轢き逃げ事件を起こした犯人、それと同乗していた、いわゆる二、三日後に被害があった女子高校生、これがその犯人によって殺害されたと、いわゆる栃木県下、雪の中での発見という新聞報道のあった通りでございます。

二件目は七月に発生しました。西葛西に勤務していた飲食店の方です。この方が自分の勤めている関係者によって、山梨県下富士吉田のスカイライン上において、やはり轢き逃げを装った保険金殺人の被害者ということになっております。

まずその被害者の方は、いずれもこの葛西地区の中学校で学ばれたということを申し添えておきます。そして三月の件におきましては、中学校の先輩、後輩という関係でということでも報道がありますので、公務員としての守秘義務はありますが、報道された事柄ですので、江戸川区そして葛西の人間の携わった事件だった。そしてですね、西葛西の事件もやはり、これは報道がありませんので、若干言葉をぼかしますけれども、葛西の学校を卒業した可能性があると、犯人は複数ですので一人二人三人というので、いずれか誰かに当たると思いますので、そのように可能性があるという言葉で濁しておきますが、そういうふうな状況でございます。この半年の間に殺人事件の犯人になったものが二人、そして被害者になったものが二人というような現実がある訳なんです。いわゆる現在の少年どうのこうのというのも大事ですが、振り返ってみますと僅か四、五年前、そして十年前、この葛西

の学舎で学んだ子供が、そういうふうな重大犯罪を犯しているという現実であります。そしてまた、今度はごく身近な事件といえますか、ピッキング犯罪が大変増えておりまして、警察は犯人を捕まえても、三ないし四名のグループで、この葛西は金の山の宝の山ということで中国人グループが荒し回っております。そして一つのグループを検挙しますとすぐに次の日に別のグループが入ってきて、多いときには十三件もの泥棒をやっていると。皆様方ご家庭の玄関ドアですね、錠前をピッキングに強い錠前に変えていただきたいなというふうなことでございます。

ではまえがきが十分長くなりますので、当署管内の少年の非行状況といえますか概況を申し上げます。当署管内には小学校、中学校、高校と合わせまして三十四校ございまして、約一万八千、二万といってもいいと思いますが二万名のお子さんが学んでおります。そしてこの子供さんたちの中でも、やはり出来心といえますかそういうふうな具合で警察の補導を受ける子供がおります。犯罪少年と専門的な言葉で申し上げますと、いわゆる十四歳以上の刑罰法令に触れる少年ということでございます。年齢が十四、これが百五十二名ございました。そしてそのうち治安悪質につき逮捕を必要としたものが九名と厳しい姿勢で臨んでおります。触法少年ただいま申し上げました十四歳に満たない子供、これが四十一名ですね。これを補導していると、そして累犯という聞き慣れない言葉ですが、一名、これは親の監護に相当な理由なく服しない、家庭に寄りつかない、犯罪性のある人とまたは不道徳な人との交際、またはいかがわしい場所へ出入りする等の行為をするまたは他人の特性を害する行為をする少年ということで一名を送致しております。そして数も一番多いのが、喫煙や夜遊び等々三百七十名を補導しておりますが、実際もっと多い子供さんが補導されないで街にいないかなというふうに感じている次第であります。なぜかと申しますと、本日までに葛西管内で発生した、いわゆる乗り物等自転車盗ですね、約千七百件ございます。そして自転車泥棒等を捕まえてみると、ほとんどが少年であるというふうなことを予測推測しますと、それ以上の数の子供さんが悪さをしているのではないかと感じる次第でございます。そして小学生の十四歳未満の子供さんですね、どのような犯罪をやっているかという点、ほとんどが万引きでございます。そして中学生、これはですね自転車泥棒または別な泥棒さんが置き去りにした自転車をちょこまかしたとか、失敬した横領罪、そういうふうなものです。中には先程九名の逮捕がありましたと申し上げましたが、これが引ったくりでございます。中学生が引ったくりをやっています。引ったくりは逮捕で臨みますので、ご了解願います。高校生の犯罪、やはり自転車等の乗り物と体力

的に成長しますので、年下の中学生からの恐喝等をやります。では江戸川区全体から見た数字はどのような具合かと申しますと、江戸川区内には小松川警察、小岩警察がごいます。やはりチャンピオンでございます。葛西ですね。そして一年間、元日から本日までのような推移をするのか簡単に申し上げますと、正月が始まりましてスローペースで補導件数が進むわけですが、やはり夏休みに入りますと急激に増え続けるというような状況を示しております。特異な事例としましては、下町気性といえますかよく分かりませんが、いわゆる隣の地区の中学生を自分の子分にしようまたは支配下に置こうというようなことで、若干の対立抗争を起こしたこともございまして、この件に関しては管轄警察署同士十分注意を払っております。

また葛西地区には飲食店が多数ございまして、現役の中学生をいわゆるアルコールを出す店でホステスとして使っていた店、そういうのがございまして、現在身柄を逮捕拘留のうえ調べている次第であります。そのような犯罪に走らない、または犯罪の被害者とならないために警察だけではそのような活動も十分にできませんので、少年補導員や少年警察共助員また母の会補導員等、またそしてお隣におられます、金井先生などの保護司会の皆様方のご協力を得まして、非行に走った青年を引き戻しまたは非行に走らないように努力している次第であります。どうぞよろしく願います。

☆コーディネーター 山崎 友丈

どうもありがとうございます。先生今の話で、フロアの方が多分色々とお聞きになりたいことが多分あると思うのですが、私の方から多分こんなことがお聞きになりたいと思っていますんですけど、江戸川区の少年犯罪が色々ありますよね、先生が今おっしゃった自転車泥棒であるとかそれから喫煙、この辺は犯罪というか非行というかですね、万引き、恐喝、引ったくり、この辺になると犯罪になってしまふと思いますけれど、これがですね江戸川区というのは、その日本全体から見るというか、何といえますか全体から見ると多い数なんでしょうか、それとも平均、内容と数なんですけれど。

☆遠藤 誠 課長

全国的な統計というものが我々の手元に来ませんので、都内レベルでよろしいでしょうか。やはり都内レベルで申し上げますと、高い方に位置します。本日は資料を持ってきておりませんので詳しい数字は申し上げますけれども、申し訳ございません。(こういう内容ですか、東京都内というのは?)

今年はたまたまこの葛西管内ですね、悪質な事件といえますか、それが発生していないのは幸いですね。去年の例で言いますと、非常に事件処理に苦勞した悪質な暴走族の事犯があったというふうに存じております。

☆コーディネーター 山崎 友丈

遠藤先生から少年犯罪について、こういうものが今、現実としてこの署内に起こっていますよということがわかりました。そうしますと当然、犯罪を犯した少年たちは何とか立ち直る更生をさせなければいけませんから、その視点ですね、今度は金井先生にこういう子供たちが一体、どうしてこうなるのか、あるいは更生してくる段階で我々がどんな手助けをしなければいけないのか、何が大切なのかをお話ししていただこうと思います。

金井先生お願いいたします。

☆江戸川区保護司会長 金井 兼吉

更生保護

いつ頃保護司というものができたのか、戦後荒れ果てた時に、非行少年の第一ピークをむかえたのが昭和二十五年なんです。その時にこれではいけないと江戸川区で立ち上がったのが二十五年の四月なんです。ちょうど今年で五十年になります。この五月に五十周年をやりました。

その甲斐^{かい}があつて犯罪が少なくなってきました。私たちの仕事は法務大臣の委嘱を受けて地域に根ざした社会奉仕をしてください。それからとても大事なことですけれど、いろんな所から情報が入ったことは秘密の保持をなさということです。

私たちは更生保護と言います。更に生まれ変わって世のため人のために貴方は尽くしてくださいよ、という意味でご理解いただければありがたいと思います。

私たちの仕事は、犯罪をした者の改善および更生を助けるとともに、犯罪の予防のために、世論の啓発に努め、地域社会の浄化を図りながら個人および公共の福祉に寄与することが、私たちに課せられた使命でございます。そして江戸川区は幸いありがたいことに人口が六十三万という鳥取県の人口が六十三万だそうで、私はラジオで聞いたので間違いないと思います。それでそれ

には保護司の定数というものがあるんです。これは二十三区の中で五番目の定数は二百二十六名です。現在は百七十六名で充足率が七七%なんです。もっとも二十一世に向かって犯罪は増えてくる。それには今、刑務所の方がいっぱい出てくる。それに対応するのが私たちの仕事です。どうやって受け入れしづらいかということ、大きな仕事が二つあります。毎年七月一日社会を明るくする運動、幸い江戸川区の多田区長さんが実施委員長になっております。多田区長さんを先頭に明るい社会で、明るい住み良い江戸川区のために頑張っております。それが七月の一日、今年で五十回目を迎えます。それから二番目に大切なのは何かといったら、環境調節というのがあるんです。帰ってきた時に周りはどうなってるか受け入れ体制は良くできているか、受け入れ体制ができていないと帰ってきてすぐに戻りしてしまうのです。そういうことのないようにしっかりと受け皿ができてくるかそれを調べて報告をして、それではこの子は帰れるよといって帰ってきたら、私たちが面倒を見るといのが仕事でございます。

それで先程申した通り秘密を厳守して知り得た情報については、親戚だろうが家族でも皆秘密を厳守していかなければ大変なことになります。それを念頭にしています。

それで先程、非行のこととどうだということで一だけ例をあげさせていただきます。これの非行の原因ですね、私は八街少年院の特殊面接員をやっています。それは何かといいますと、ある子が三カ月、四カ月たったら帰れるよという子を面倒を見るんです。見てそれではいいなこととやるんです。それでこの子たちが帰る前に身体で奉仕して外で奉仕するのです。それは何かというと、ここでは千葉県の成田山、成田山の境内の掃除活動をして、やはり外の空気をすっかり味わって、それで出院するということ、これを一つの目安としてやっております。

それから受け入れ体制ということを整えて帰ってくる時に、このようなことがありました。再犯というのですか、その家庭は中ぐらいいんですけれども、自分で職を探したということは私は立派だと思います。自分で働いて給料をもらった、給料を親に出した、親が袋を開けて調べたら、一万円札がたんまりあった、お前これでは食い扶持が少ないんじゃないの五万ぐらい出したらいいんじゃないの、こういうふうにいった親のその一言で、折角自分が職を探して定着してこれから働こうという時に、親が昔といつか、そういうふうなことでですね、また今度は暴走族の仲間と一緒に入って、そして今度はかっぱらいをやった、また入ってき

た子を私面接したんです。そういうふうなことで、家族は温かく迎えてあげることが大事です。それと同時に私たちが一番大事なのは、地域の皆様方の協力がなければ駄目なんです。あの子は少年院から出てきたからといって白い目で見てはいけません。むしろ頑張っているね、やっていますね、というそういう言葉を皆さんからかけていただいて彼らは成長すると思います。

私たちの仕事は地味であり、そして無給であり、ボランティア活動ということでやっております。ありがとうございます。

☆コーディネーター 山崎 友丈

先生、犯罪者として生まれてくる人はいないんですよ。生まれてきた人は皆平等なんですよ。ただちょっとした環境、ちょっとしたつまずきで犯罪を起こしてしまうことがある。

どんな少年たちも更生する力がある、自分のことを更生する力は自然にあるわけですね、更生する力を大人たちがどのように手助けをしてあげるのか、それがとても大切ですね。

☆金井 兼吉 会長

少年院に入ってきた子供たちの目は散らばっていて、すごい顔をして入ってくるんですけど、それが規則正しい生活をするときりっとするんです。その姿で帰ってくるんですから、受け入れ先で「頑張ってきたね」と一声かけてあげる、やはり褒め言葉とこのですか、それが大切だと思います。

☆コーディネーター 山崎 友丈

規律ある生活というのは、確かに健康になりますし、もう一つは奉仕活動をする、ボランティア活動ですね、そこから人間の優しさというものが芽生えてきますから、やっぱり非常に大切なお仕事なんです。やっぱり親が大切なんです、親の言葉掛け、それにともなって地域の社会がどう援助してあげられるのかということが大切になってくるんですね。そうなりますと遠藤先生も金井先生も同じことをおっしゃっておりますけど、これは教育なんだと思うのです。そうしますと子供たちを行政の面から、教育指導室の高崎先生はこの教育をどんなふうにかこの子供たちを見ているのか、この辺の教育の観点からお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

☆江戸川区教育委員会指導室長 高崎 彰

江戸川区ならではの新しい心の革命を

教育委員会の指導室というところがございまして、教育の内容、先生方の研修を含めた人事の問題を担当しています。よろしくお願いたします。

元中学校の校長をしておりました。その前は指導主事の役割で、島、あるいは西多摩の山奥あるいは八王子市の大きな自治体を経験してまいりました。その中から江戸川区の今の子供たちの様子というのがよく見えるなとそういうふうになんか考えさせられますので、ちょっと発言をさせていただきたいなと思います。

先程遠藤課長さんの方からお話がありましたが、私の席に掛かってくる電話というのは、殺人にかかわる卒業生の話ですとか、引ったくりにかかわる子供たちの話ですとか、学校同士の抗争ですとか、本当に目を覆いたくなるような事実はございます。が、私どもはですね未来に向かって希望を持ってやっていかないと、教育者としては駄目ではないかと考えております。

中世のヨーロッパの宗教改革のリーダーの一人であるマルチン・ルターの有名な言葉の一つに、「たとえ明日全世界が滅びようとも、私は今日リンゴの木を植える」という言葉があります。私はいくつかの島を回って、どここの学校、島にも明治六年あるいは七年というかなり古い明治時期に建てられた学校がありますが、いずれの学校にもその学校の中心に、大きな木があると、つまり木というのはその島の学校の歴史だと思うのですが、多くの子供たちがその木のもとに集まりですね、目を輝かせながら先生の話聞き、島の中心としての役割というのを生涯にわたって果たしていったんだろうなと思います。

まさしく子どもの教育というのは、木を植えることであり、さらに木の下にたくさんの子供の目を輝かしている子供たちを集めてですね、その子供たちの心に本当に未来につながる種を植えていくんだという、希望なしではできないという一つの営みではないかなんか思っております。さらに話を進めさせていただきますけれども、私が八王子におりました時、こういう体験をしました。八王子の郊外にJICAといまして国際協力事業団という組織がございまして、そこには研修生という方々が本場に世界各地から集まって来られる。例えばコンゴ共和国ですとか、カメルーン共和国ですとか、モザンビークですとか、さまざまな国の方がこのジャイカの施設に集まってくるんですが、実はここに送り込まれる研修生というのは、その国のいってみればリーダー中のリーダーと

いう方で、帰られると、ひょっとするとあと何年かでは文部大臣になれるような、そういう方ばかりなんですが、八王子ではそういう方をご案内して、学校の実態というものを見てもらうということをしています。

日本のですね整然と、教員を中心に行われる伝達型の教育の素晴らしさということを皆さん一様に褒めるのですが、ある学校です。このジャイカの研修生、アジアの方だと思いましたが、こういう発問をされて私も校長も答えられなくて、目を白黒させたことがあります。今日みさせていただいた授業の中で、チャイニーズキャラクターつまり漢字を使っておられますが、こは日本ですよねと、漢字を使うのはなぜですかと、日本には片仮名、平仮名と日本の文字があるのに漢字を使うのはなぜですかと、不思議そうに聞かれるということで、私もはどう答えたらいいかと思ったのですが、今インターネットで英語が国際共通語と使われているように、我々東洋の人間は漢字という一つの文字を使ってさまざまな情報を伝達する中で我々の心を伝えてきたんですよ、という説明をしたら何となく分かったような様子でした。それからもう一つこういう質問がありました。今、日本ではさまざまな教育改革が行われている。あるいは世界に冠たる学習指導要領というナショナルカリキュラムがあるということをよく聞いているのだけれども、ところでナショナルカリキュラムの背景にある一つのイデオロギーといえますか考え方というのは何なんですかと、これが分からない教えてくださいということ、何人かの校長会の指導者がいるんですが、どういうふうに説明したらいいかというところで困ってしまいました。日本の子供たちの心を支えているものに、例えば仏教ですとか儒教というのがありますと、あえていうと仏教、儒教それから戦後さまざまなヨーロッパの国々から学んだ思想というものを我々はうまく取り入れながら学校教育というものをつくっているんですが、ところがですねなかなか納得していただけないということで、敵もさる者で将来は文部大臣になられるような方ですから、日本の教育の神髄というものをぜひ学びたいと来られたんですが、残念ながらその確な答えができなくて大変悔しい思いでおります。それと同時に日本のこれからの教育というものを支えていくフィロソフィーですね、哲学というものを今後やっぱりきちんとつくっていく必要があるかと思っております。ちょっと長くなりましたが、もう一つ話させていただきます。

先程野木先生のお話の中で、幕末の指導者たちのお話でしたが、私の祖先は鹿児島でございまして、鹿児島県の中に一つの男性が、理想像として染み付いているんです。西郷隆盛でございまして、幾度か辛酸を経て、心高志いよいよ高志、幾度か

辛酸を経て、ということでも苦しむ得ることによって、その人の上部の志がどんどん高くなっていくんだとそういう言葉があります。最後には上部玉砕瓦全を残すという言葉が続くわけなんですけれど、学校教育という一つの仕組みの中にですね、困難とか克服しなければならぬですね、苦しみというものを意図的に取り組むことによって、それを克服させることによって子供たちの魂を鍛えていくということが、今こそ重要なのではないかなと思っております。実は大変誇ることに江戸川区の中学校でいいますと、部活動に熱心な先生がいっぱいいるんですね。たとえば昨年度は小松川第三中学校ではバレーボールで全国制覇をなし遂げたということで、江戸川区の部活動の果たす役割というものは全都的に見ても大変大きいということで、教育は部活動だけではありませんけれども、例えば今、江戸川区には素晴らしい実践というものがいっぱいある訳ですから、こういうものを土台にしながら、江戸川区ならではの新しい心の革命といえますか、教育の革命を実践していければいいなとそう考えております。

☆コーディネーター 山崎 友丈

どうもありがとうございます。先生ちょっとだけ質問していいですか。先生がおっしゃった儒教とか仏教とかですね、心の教育というのが大変なことになって、文部省も心の教育というのを謳っておりますけれども、実際に子供たちにはどんな教育をしているのでしょうか？

☆高崎 彰 室長

心の教育といえますのは、その子の生活経験のすべての中で行われるべきものだと考えておりますが、あえて学習指導要領でいいますと道德の時間というのが週一時間で、年間でいいますと三十五回にわたってやらなくてはいけないことになっているんですが、実は道德の時間だけやっていればいいんではなくて、例えば特別活動、この中には部活動もありますし、それから学級会もありますし、生徒会や児童会の活動もあります。各教科の中で、例えば社会の中で、今はどちらかというと人物中心の社会というものを大切にしているという考え方がありますけれども、優れた先人たちのさまざまな業績というものを、本当に教員たちが心を込めて話をするということによって、子供たちの心の大きな変化が起きているということで、私は学校教育の中で特に道德の時間だけではなくて、さまざまな場面で本当に一瞬でも教師と生徒が語り合える場面でも心の教育ができると思いますので、基本的には広い場面で道德教育をやっていくというのが学校教育における道德教育のスタンダードかなとまさに考えております。

☆コーディネーター 山崎 友丈

そうすると先生方にはそういった共通認識があって子供と接していく。例えば部活動もそうですし、教科の時間もそうですし、体育の時間でも技術を教えていくのではないんですよ。チームワークとか人間と人間の関わりを教えているんだと一つひとつ教員が意識付けて教育していくということなんですかね。

☆高崎 彰 室長

その通りだと思います。

☆コーディネーター 山崎 友丈

どうもありがとうございます。これは教育というのは先生がおっしゃったように、やはり一人ひとり指導者側の方にも大きな役割があるんだと思うのです。しかも指導者で非常に大切なのは、やっぱり一番最初、幼児の頃一番最初に携わったのがどんな先生であったのかというのがものすごく人格形成に大きな影響を及ぼすんだろーと思いますね。ですから本当にこれは幼児教育につながるのだと思いますけど、幼児教育の大切さとして、これこういう事件が起こる原点はもしかしたら幼児にあるんじゃないかと皆が言い出してる訳ですよ。ですからこの幼児の変遷みたいなものと心の変遷ですね、というようなものとどう人間づくりを幼稚園はしているのか、非常に大切な幼児期を扱う先生にお話をお願いしたいと思います。松川先生お願いいたします。

☆江戸川区松江幼稚園長 松川 郁子

最も大切な幼児教育

青少年の犯罪が起こるたびに、幼児期のこの子の育ちはどうだったのだろうかと問われます。そのような時、私はいつも責任を感じるのですが、今日は私は現場の園長ですので、現場のお話をさせていただきたいと思います。今日はお芋掘りの遠足がありましたので、そのお芋掘りの遠足の中で幼児の心はどうだったかというお話をさせていただきたいと思います。

今日お芋掘りに行きましてお弁当の時間になりました。五歳の男の子がお弁当を食べている途中に、お弁当が喉に使えてパニックになりました。私はすぐ駆け寄って肩を叩き処置をいたしました。そうしましたらクラスの子供たちが皆寄ってきて、ある子供はティッシュペーパーを出して先生これで、ある子供は私と一緒に背中を叩く、ある子供は「だいじょうぶ」と声を掛ける、ある

子供は自分の水筒の水をコップで汲んでこれ飲みなど渡す。そういう姿が見られました。私はその時にこの子たちは大変心が育っている子供たちだなどとても嬉しく思いました。なぜかと思えますと、ある子が困っている時に寄って行ってですね優しい気持ちを表せる、心配している気持ちが表せる、それからどうしたのかなあと言って、早く良くなったらいいなあという気持ちを言葉や行動で表すことができる。そこに私は、大変この子供たちは育っているなというふうに感心いたしました。でもこういう子供たちは幼稚園に入って、すぐにこういう姿にはなりません。その子供たちは今、五歳の年長ですから、約一年半生活をして築かれた心のありようです。こういう子供に育つということが私の理想ですので、あらゆる生活の場面で、子供たちがお互いに優しい気持ちや思いやりの気持ち譲る気持ち、それから助ける気持ちですか、そういう気持ちが育まれるように努力をしています。幸い私の園の先生たちは大変すばらしい先生たちばかりですので、子供たちの良きモデルになっている訳でして、このモデルがあるからこそ子供たちはそういう姿を示せるのですね。すばらしいモデルを自分で受け止めて、またそれを表現することができるということです。しかしですね、こういう姿の子供たちもいれば、一方ではやはり、大変わがままで自分勝手な子供も増えております。そういう子供たちは大変素直にするのがとても苦労なんです。そういう子供たちの背景を見てみますと、やはり若いお母さんやまだ子育てを何度も経験していらっしゃるお母さんたちが、今どういうふう子供たちを育てていったらいいかということで大変悩んでいらっしゃるんですね。その悩みも打ち明ける場所がなかなかなかったりして孤立してしまって、その不満が子供の方に行く訳ですね。子供を攻撃しますので、攻撃された子は幼稚園に行って他の子供を攻撃するというような構図になっている訳でして、私は保護者の方々がもっと心を開いて子育てをどうしたらいいかということを皆で考え合って支え合って助け合っていく、そういう状況がつけられることを望んでいます。それは幼稚園でもそうですし、地域でもそうですし、国全体でもそういう動きがあつてとにかく人に対して優しくかわれる、そして思い合ってかわれる、そういう状況がたくさんいろいろな所で起こることがとても重要なことだと思っています。でも大変このことは難しいことですが、こういう機会に皆様方と考えさせていただきたいと思っております。

☆コーディネーター 山崎 友丈

先生、幼児期的人格形成につきましてですね、これは基本になってくると思うのですが、大きくなっていく過程のなかで、一番

最初であるのは、やっぱり幼児期のことがずーと引き続き大きくなっていく訳ですね、人格形成に影響していくわけですね。その時に多くの人は母親が多く教育をする環境にある訳ですね。先生方がいい見本を示しても母親というのはどうしても、今の母親は自分の子供を所有物に考えてしまうところがあって、子供だからいいんではないかと子供の人格を無視するところが見えたり、それからすぐ今、子育てが難しい世の中になっていませんか、あの価値観が変わってきているような気がするんですね。例えば子供が砂場で遊んでいた。そして砂場で喧嘩が始まった、そして砂をかけた。この時に止めるか止めないかの問題なんですけれども、その時にあるお母さんは「いいのよ、こういうことで人間関係を学ばし、こういうことで痛さを知るんだよ」と、一方ではあるんですね。もう一方では親が「こんな時からいじめの芽ができて、この子は乱暴な子よ」と言ったら、もうこのお母さん同士は二度と遊びませんよね。こういう関係の中でいい子供たちが育っていかないんだと思いますね。そうしますと先生、親の教育というのがこの幼児期の教育に非常に大切なことにならないかなという気がします、いかがでしょうか？

☆松川 郁子 園長

そうですね、私はある程度の年齢になりましたのでね、少しは人よりいろんなことが分かるかと思うのですが、今の若いお母さんたちは、お母さんたちも愛されたいんですね。お母さんたち自身も、もっと自分たちを認めて欲しいし愛してほしいし、一緒にゆっくりと子供たちたちを育てたいと思っているんですけれど、そういう状況がなかなかつくられないんですね。今の砂場の例で言いますと、もし仲良しのお母さん同士だったら「あら、またやってしまったわ、ごめんなさいね」というようなことでね、お互いを許すことができるんですね。ですけれどお互いを許すということがなかなかできにくい状況があって、それがトラブルになったりいろいろな事件になっていたりしているんだと思います。

(それはやっぱり母親の幼児性なんですか?)

そういう面もあると思います。

☆コーディネーター 山崎 友丈

子供というのは不思議なもので、お母さんと二人でいる時に子供さんを褒めても、お母さんはあまり反応しませんよね。でもお母さん今日は素敵な洋服を着ていますね、と言うとにこっと笑いますよね。これやっぱり幼児性なんですよね。この辺はやっぱり

りお母さんの教育を含めて幼児期は大変ですよね。いよいよこういう教育の過程を経まして、思春期ここが一番大切なことなんだと思います。そしてですね、吉村先生にはいろんな時代から子供の変遷があったんだと思うのですが、今の子供を語る時よりもまずどのような子供たちが育ってきて今に至っているのかということが物すごく私は大切だと思いますね。ですから社会背景とともに、どんなふうに子供たちがなっているのかをお聞きしたいと思います。吉村先生お願いいたします。

☆関東第一高等学校長 吉村 正昭

心を育てる社会づくりを

はじめに学校の概況をお話ししたいと思います。私の学校は大正十四年の創立です。昭和十四年に神田から現在の江戸川区にお世話になっております。ちょうど今年が創立七十五年目になります。本校は普通科、工業科があります。学年普通科が四百名、工業科が機械・自動車・電気・建築とありますけれども二百名、合計六百名で現在、三学年で千八百名の男子の生徒がおります。この中で都内の生徒が五二%、千葉県、埼玉県、埼玉県の生徒が残りとなります。地元の江戸川の中学校からは、毎年、概ねですが、百八十名の生徒さんに来ていただいております。また同窓生は約三万名を超えています。この江戸川でも多数の卒業生が活躍されております。こういうことで本校は、私立ということと男子校ということで、私がこれからお話しすることは狭い一面からの視点になるかも知れません。生徒全体を把握しているということにはならないと思いますが、ご了解をいただきたいと思います。そういうことで年代を振り返ってみますと、昭和三十年から四十年代の高校生、思春期の子供らしいと言ったらいでしょうか、この頃は、夢と希望こういうものをはっきり持って、その夢と希望に向かって主体的に行動が出来た生徒が多かったように思います。これはある意味では努力をすることによって、それが報いられ、社会で自分の夢が達成できるという努力の甲斐があるということが社会に受け入れられた時代ではないかと思えます。

特に青年期の若者たちも、自分の夢を実現することへ努力をするために、主体的に行動する人が多かったように思います。ちょうど時代背景は、好転して東京オリンピックの頃、テレビの普及が始まる時期になっているんじゃないかと思えます。個人の努力が受け入れられる社会、受け入れられた社会という年代になるでしょう。それが昭和五十年代に入りますとどうしても学力偏重主義、子供たちが伸び伸びとした生活ができにくくなった時代と思われれます。特に塾通いの子供たちが増え、学力主義というもの

が中心になりました。その結果、型にはまった子供たちが多くなり、創造性が低く夢を持つことも少なく、極めて現実的な子供が増加したように思います。そして大きな希望を持てずに来たような感じを私は受けております。ちょうどこの時が高校の進学率九〇%、併せて高校中退者の問題が社会で取り沙汰された時代です。この時代を大げさにいうなれば学力偏重、個性の喪失の始まりと、こんなふうに言うことができるのではないかと思います。世間ではオイルショックあるいはロッキード問題、VHSのビデオが発売された時代にあたります。昭和六十年代に入りますと夢など持てない社会、子供たちの意識も社会に適応することに精いっぱい、小ぢんまりとした心の狭い子供が増えたように思います。社会に適応することが中心で、自分を抑えて人に合わせるような子供が増え自立しにくくなったように感じます。小ぢんまりとした心の狭い子供が増えた時代というふうにいえるのではないかと思います。ちょうどこの頃がファミコンの普及が盛んになってきた頃ではないかと思えます。平成に入りますとこの六十年代の傾向がますます強くなり、子供たちが自立できない環境、社会が進み、自分の思っている夢やあるいは目標などが絵に描いた餅のように無残に打ち砕かれた時代に入ったのではないかと思えます。ある意味では社会が成熟したのでしょうか、あるいは社会が思春期の子供を受け入れなくなったのでしょうか、その結果精神的な欲求不満が増し爆発する子供が増え、切れるという現象が問題になってきた時代です。切れる若者の時代へ突入したわけです。ちょうどこの頃がパートタイム、お母さんのパートタイムの増加が六十年代の三倍になった時期といわれています。このように簡単に時代の変遷をたどりましたけれども、やはり子供たちが大人の社会の変化に犠牲になっているという、こういう言い方をしても過言ではないかと思えます。大人の世界はストレス社会に移り、そして鬱病に代表されるような心が病む大人が増え自殺者が増加する時代に、思春期の子供たちの子供も、非常に育ちにくい社会になってきていると思います。このような意味からも私たち教育の現場としては、心を育てる社会づくりということに重点が置かれるべきではないかと思えます。長くなりましたが、最後に私の学校では江戸川区の自動車振興会にお願いしまして十日間の現場実習ということをお願いしています。自動車の修理をするプロの地元の皆さんに、子供たちが学校で学べない技術の指導とか職場における人間指導を受けます。この期間が終わると子供たちは大きく成長して学校へ戻ります。このことがもうすでに八年間続いております。社会では今頃になってインターシップと騒がれていますけれども、日本全国でもこのようなことは江戸川区でしかありません。私たちはこのことを非常に誇りに思っております。そして江戸川という土地柄、これを非常に子供たちの育

成ということについては温かいそういうものを持った土地柄ということ、このことも私は非常に誇りを持っております。私は恩師から言われた言葉を披露して閉じたいと思います。それは人はやはり自分の身近なところから大切にすべきだと、簡単に言いますとやはり親子、家族そしてお世話になった人々、当然そこには学校の先生もいるでしょうし、それから地域社会でお世話になったこともあると思います。これは循環してまた同じことが営まれるのではないかと思います。そういうことを考えた時に、まずいわれたことは非常に簡単ですが、嘘をつく、真っ正直に生きるというような簡単なことですが、実際は難しいことです。こういうことをもう一度子供たちに、駄目なものは駄目、いいものはいいいというこの大人の判断で子供を育てるという視点から見直しして、そしてその実践をこの江戸川から広げていきたいとそんなような気持ちで今日は参加させていただきました。ありがとうございました。

☆コーディネーター 山崎 友丈

ありがとうございます。いま先生のお話は家庭をしっかりとするという意味ですよね。家庭がしっかりとしないからこういうことになるんだ。平成からパートタイマーが増えてきたということですが、母親も働くようになり、切れる子供たちが増えてきたということは、家庭の影響が物すごく大きいということになるんですね。家庭がしっかりとしないと思春期の子供は支えられませんかということになるんです。ただ今の先生のお話を聞いていると、流れからいくと、どうも志とか夢とか持てる社会をつくらないと駄目ですか？

☆吉村 正昭 校長

そうだと思います。やはりあの金とか物とかというものは、一時人間の気持ちを満たすかもわかりませんが、やはり人間として正義感とか使命感とかということ。これがやはり特に私のところは男子生徒ですから、そう意味では非常に重要な要素になるかと思えます。その辺をどう育てるかということにかかっているのではないかと考えています。

☆コーディネーター 山崎 友丈

そうですね。思春期の子供たちは、目標をもってその目標に向かっていく、それをいかに家庭が支えて周りがその目標を達成させるために援助してあげるのか、とてもいいことなんだと思いますね。これは大切だと思います。

各先生からそれぞれのご意見をいただきました。それではフロアの方からもしご質問があれば？

☆フロアの質問者

本当に素晴らしい先生方のご発言を聞いてまして私も長年教育関係のところにおりますけれども、やはり毎日毎日の積み重ねの中にですね、育て方の中で子供だけの問題だけでなく、環境を取り巻く社会、教育環境、すべての環境がやはり今日の日本になっているのではないかと、野木先生が熱っぽくご発言なさっていたように少年犯罪とか、いろんな犯罪というのはその子たちにあるのではなくて、逆に我々先輩がそういう子を育ててしまったというそのような反省というのをどのような形で教えていけばいいのかご指導いただければと思います。よろしくお願いいたします。

☆コーディネーター 山崎 友丈

今の質問は、これからの教育の反省をふまえてどうやっていけばいいのかということですね。どなたか先生お願いいたします。

☆フロアの質問者

司会の山崎先生にお願いします。

☆コーディネーター 山崎 友丈

教育というのは学校教育、家庭教育と地域の教育とこれは三本柱です。私は、教育の中で一番大切なのは、子供を皆育てていくという気持ちがあるかどうかです。

うちの子供さえよければいいという考えがないかどうかです。よその子供を叱ったりそういうことを出来ない社会になってきている。ですから皆が悪い意味での個人主義だと思っています。自分の家の子供さえよければそれでもいいという風潮がどうもあるんです、今の社会の中に。ですからやっぱりそういうことではなくて、子供というのは日本の財産であるし地域の財産でもあります。しかもこれから皆さんを背負って立つような将来のある子供たちです。ですからやっぱり知らん顔しない。先程、吉村先生がおっしゃいました。いいことはいいい、悪いことは悪い。この辺のモラル、社会的なモラルをきちっとそういうお互いの教育の中でやっていかないと駄目なんでしょうね。家庭では許されるけど社会では許されない、でも社会では許されるけど家庭では許されない、そしたら確実に家庭に来て悪いことをするし、社会で許されるのであれば家庭ではしっかりしているけど社会に出たら何をするか

分らないという。こういうのでは駄目なんです。悪いこといいことの共通認識をしっかりと持った教育をしていかないとやっぱり駄目だと思います。そういう意味では三つの教育の柱の共有化ということです。これからの教育に大切だと思っています。よろしいでしょうか。ありがとうございました。

閉会

☆國士館大学教授 中島 眈

わたくしは野木先生と同じ大学に勤務いたしております中島と申します。

本日はこの様な素晴らしいシンポジウムに出席させていただき感謝申し上げます。

二十一世紀は少子化高齢化時代の中、世情不安な事件や青少年犯罪の増加、凶悪化など青少年の穏やかな成長に陰を落とす暗いニュースが後を絶ちません。

次代を担う若者は、これからの社会の中心ともなるべき世代であり、無限の可能性と活力をもっています。こうした若者が意欲と希望をもって社会に参加できる環境をつくる事は家庭、学校、地球、行政等の全てが協力して行動してゆかねばならないと思います。

東京都では、「心の東京革命」を打ち出し、ついで本日は江戸川区においてそのシンポジウムが行われました。

次は、わたくしが住んでおります世田谷区においても何か行動を起こさねばなりません。そしてまた、世田谷から他区へ…区から県へ…県から国へと…この運動をつなぎたいと思います。

本日は、未来につなげるこの集いを江戸川区から全国に発信していただき感謝申し上げます次第です。

誠に簡単では御座いますが閉会の辞とさせていただきます。

参考資料

シンポジウム

「日本、今そこにある危機」

（心の東京革命を江戸川区から）

PROGRAM

日時 平成12年10月27日（金）PM 6：20～

場所 江戸川区民ホール・大ホール

（都営新宿線 船堀駅前）

主催 未来につなげる人づくりの集い

後援 江戸川区教育委員会 江戸川区保護司会

警視庁小松川警察署 関東第一高等学校

警視庁葛西警察署 江戸川ロータリークラブ

警視庁小岩警察署 國土館大学武道徳育研究所

警視庁江戸川少年センター

△プログラム▽

司会

今澤雅一(作詞曲家)

オープニング

PM 6:20

開会の辞

実行委員長

中 眞久

来賓挨拶

江戸川区教育長

池澤正彦

衆議院議員

宇田川芳雄

江戸川区議会議長

松下彰男

メッセージ披露

祝電披露

I部、シンポジウム

PM 6:45 ~ 7:50

1、基調講演「日本、今そこにある危機」

國士館大学教授・武道德育研究所長

野木將典

2、シンポジウム「未来につなげる人づくり」

コーディネーター

学校カウンセラー・臨床心理士

山崎友丈

パネラー

江戸川区教育委員会指導室 室長

高崎 彰

葛西警察署 生活安全課 課長

遠藤 誠

江戸川区松江幼稚園 園長

松川郁子

江戸川区保護司会 会長

金井兼吉

関東第一高等学校 学校長

吉村正昭

閉会の辞

國士館大学教授

中島 獬

―心の東京革命を江戸川区から―

少子高齢化社会の中、次代を担う若者は、これからの社会の中心ともなるべき世代であり、無限の可能性と活力をもっていきます。こうした若者が意欲と希望をもって社会参加できる環境をつくることは、私たち大人に課せられた使命ではないでしょうか。

こうしたことから、このたび、江戸川区民の有志により「未来につなげる人づくりの集い」を結成し、その活動の一環として、江戸川区教育委員会他多くの団体のご支援のもと、ここにシンポジウムを開催いたしました。

私たちは、江戸川区の「幼児、児童、生徒健全育成」推進運動と、東京都の「心の東京革命」運動の展開とに協力し、より多くの江戸川区民のご理解と協力を得ながら、人づくり、社会環境づくりに努力してゆきます。

「未来につなげる人づくりの集い」

代表 野 木 將 典（國士館大学教授）

発起人（アイウエオ順）

上野 操（弁護士）

中島 獬（國士館大学教授）

宇田川芳雄（衆議院議員）

平沢 勝栄（衆議院議員）

大西 英男（都議会議員）

前島信次郎（都議会議員）

佐々木 隆（江戸川区議会副議長）

松下 彰男（江戸川区議会議長）

杉 栄一（私立保育園園長会会長）

吉村 正昭（関東第一高等学校長）

田島 和明（都議会議員）

実行委員（アイウエオ順）

実行委員長 中 眞久（小松川）

実行委員 星野ときえ（船堀）

副実行委員長 駒井美江子（一之江）

実行委員 本多 良和（南小岩）

実行委員
実行委員

川口 俊夫（南葛西）
鈴木 康隆（西葛西）

実行委員 山口 邦幸（二之江）
実行委員 渡辺 清一（大杉）